小学国語

いつでもどこでも自由帳
―入学式の次の日から―

兵庫県三田市立けやき台小学校
伊崎　一夫

一年生は、話したくて仕方がない。聞いてみたくて仕方がない。書きたくて仕方がない。この表現意欲を活用しない手はない。

何を使えばいいか？　自由帳である。自由帳だから、入学式の次の日から可能である。次のような「伝え合い」活動を行えばよい。

①書きたいことを書きたいように書く
②発表したい子どもが自主的に発表する
③質問を受け応答する
④伝え合いの成果を目に見える形にする

下の自由帳は、入学式の次の日、４月11日に発表されたものである。家の駐車場に蜂の巣があったことが記されている。二階への階段途中にある窓から蜂の巣を見たという状況まで描かれている。絵中心の自由帳である。これだけの情報量があれば「③質問を受け応答する」ことが充分にできる。

質疑応答は話形練習の生きた場となり、発表内容は焦点化していく。質問の観点を整理していくことによって、話題のつなぎ方や対象への迫り方を具体的に学ぶこともできる。「④伝え合いの成果を目に見える形にする」ことも決して難しいことではない。蜂の巣という「もの」があったんだね、それが発見だね、という押さえをしておく。

下の自由帳は、４月12日に書かれたものである。学校探検での発見が記されている。保健室は子どもたちの興味関心を引きつける。普段使うトイレとは違った形のトイレがあったという内容である。画面下の「かたち」と書かれている部分に注目したい。前日の「蜂の巣」で学んだ伝え合いの成果である「もの」という観点が、「かたち」へと焦点化されている。

子どもたちは書きたくて仕方がない。だから自分が使いうる表現技法の全てを総動員して書き続けていく。その結果、多くの情報を正確に伝えることができる文字表現を中心とした自由帳へと無理なく推移していくのである。いつでもどこでも自由帳である。

いさき　かずお　兵庫県三田市立けやき台小学校教諭。第35回博報賞並びに文部科学大臣奨励賞を受賞。堀江祐爾（兵庫教育大学大学院教授）と「授業づくり実践セミナー」を実施。